

# 遠江・山と里の民俗

浜松市無形民俗文化財  
保護団体連絡会報  
第002号



懐山のおくないの大石さん

## I 懐山おくないの周辺

懐山集落は観音山の山懐に開けた村で、鎌倉時代は浜松庄阿多古懐山といわれた。南北朝時代は大覚寺統(南朝)に伝領され、近世以降は天領であった。明治二十二年の町村制施行により、懐山は上阿多古村となり、昭和三十一年他の五町村と合併し天竜市となった。更に大合併により浜松市となった。

大正二年二俣―熊往還開設される以前は、塩等の日常物資は峠越しに三河大野、新城から運ばれることが多かった。

### 南北朝争乱以降熊野(真言派)と白山融合により、天竜川沿岸の山岳地帯に信仰圏を確立した秋葉の修験達や先達に率いられた講中の人達が神沢を通る秋葉道や懐山を通る秋葉脇道を使っ

た。これら秋葉道は西に向かえば鳳来寺道となつて、多くの修験等が往来した。街道沿いには

懐山、神沢、渋川、寺野、黒沢があり、同じような田遊び系の民俗芸能が伝承されている。これら一群の田遊びは日送りで行われる修正会おくないではないかと考えられている。それをまとめると左表となる。

- 三日堂 寺野宝蔵寺観音堂 (現行三日)
- 四日堂 渋川万福寺薬師堂 (堂守芸能消滅)
- 五日堂 懐山新福寺阿弥陀堂 (現行三日泰蔵院)
- 五日堂 神沢万福寺阿弥陀堂 (現行三日)
- 六日堂 黒沢峯福寺阿弥陀堂 (現行旧正六日)
- 八日堂 川名福満寺薬師堂 (現行八日)

## II 懐山おくない

### (1) 期日と場所

古くは正月五日、現在は三日に行われている。明治二十年頃までは上下にあって、毫霊山新福寺で行われたが、泰蔵院に合併廃寺となり、本尊阿弥陀如来は泰蔵院本堂西の一室に安置し、この八畳間を準備室、南に続く十二畳を舞堂としておくないを行っている。

### (2) 生業と演目

明治二十一年懐山収穫取調によると、米 大麦 ヒエ 粟 小麦 大豆 里芋 甘藷で換金作物として、茶 綿 煙草 養蚕 紙漉である。農閑期は山稼に従事した。

- 現在行われているおくないの演目は次の通りである。
- ① 神の舞 ② 三ツ舞 ③ 槍の舞 もどき ④ 剣の舞 もどき
- ⑥ 宵の獅子 ⑦ 鬼の舞 ⑧ 仏の舞 ⑨ 年男 ⑩ 山家田遊び ⑪ 女郎の舞 ⑫ 稲むら ⑬ 駒の舞 ⑭ 猿追 ⑮ 綿買 ⑯ 塩買 ⑰ 悪魔払い ⑱ 夜明けの獅子
- ⑲ 舞納め

演目の特徴は、「もどき芸」があること、生業系が多いことと云われている。現在行われていない生業系のものが数多くあることは事実である。

### (3) 翁の復活

昭和四十年頃、本田安次先生に「懐山おくないは古型がよく残っているが、翁が無いことが惜しい。翁はおくないの中心的演目であるから是非復活してほしい」と云われた。

平凡社刊の「歴史と芸能」のビデオを見ても納得できる翁はなかった。昭和四十九年黒沢の田遊びを見学した。黒沢では翁面を頭にのせ左右に直面の者を従えた老人が、阿弥陀如来の前で、熱心に書物を読んでいる姿である。これが翁あることを覚った。そして翁を復活させた。

### (4) 翁について

脇田晴子著『能学から見た中世』によると翁の初演は弘安六年(一二八三)になっている。山折哲雄著『神と翁の民俗学』によると翁は「記紀」にあるものと「風土記」にあるものとあり、



山懐に囲まれたのどかな集落

と云う。懐山村落共同体に存在するおくないの翁は、風土記にある翁と同じと思われる。即ち古老が先祖伝来の様々な口伝を伝えるものとしても重要な存在であり、神と人間の媒介者となっていたのである。

詞章おきなさしぬきの次第になると出方は唐天竺になつており、その白い髪は波の上に座禅をし、



鬼の舞

### (5) 結び

懐山は水利のある所は水稲を畑は雑穀芋類と主食になるものを作り焼畑を含め獣害虫害との戦に苦心し、常に飢餓と隣あわせであった疫病がはやれば人が死に科学が進歩しない時代は神仏に祈る外はなかった。特に翁が唐天竺の生まれで神威をもてば、阿弥陀如来と併せて、餅を供え汁かけ飯を共食し、多くの芸能を奉納して、神仏の加護を祈ったのがおくないであったのである。

浜松市無形民俗文化財  
保護団体連絡会  
副会長 大石伝次 97歳

**本音**インタビュー  
西浦田楽保存会長  
**守屋 治次氏**

**京都で舞披露  
地域文化発信**



もりや・はるつぐ 22歳の時から能衆として舞い続けている。健康祈願で全国から参拝者が訪れる足神社（浜松市天竜区水窪町）の宮司。67歳。

浜松市天竜区水窪町西浦地区に伝わる国指定重要無形民俗文化財「西浦田楽」の保存会が11月、文化庁から招かれて京都市で舞を披露した。全国に向けて地域文化を発信する貴重な経験を通じて、伝統芸能継承への思いを新たに

「京都で舞を披露した感想は。舞台は京都市立芸術大

**先祖とのつながり実感**

主催の「伝統芸能の未来」をテーマにした市民公開講座。全国からも多くの観衆が集まり、学生や研究者の温かい歓迎を受けた。一般の人も一緒に舞つことのできる「願主の田楽」では、予想以上に多くの観衆が参加し、田楽の文化を体験してもらったことができた。西浦田楽に深い興味を持ってもらっていることを感じられてうれしかった。自分たち能衆も、田楽を続けていることの価値を再認識することができた。

「西浦田楽がこれまで続いてきた理由は。719年、僧の行基が水窪の地を訪れ、仏像と仮面を作つて奉納したことが起源とされる。今の自分たちは、先祖が脈々と受け継いできた芸能のほんの一端を担っているだけ。飢饉（きんきん）の年や戦時中でも舞

を奉納し続けてきた話を聞くと、苦難を乗り越えながら代々守ってきた先祖にあらためて畏敬の念を抱く。芸能としての価値もあると思うが、先人が残してきたこと自体に意味がある。そんな先祖の血が流れる能衆は、伝統芸能を守っていくという頑固な心を持っている」

少子化や人口減少の課題があるが、「男子世襲制が続く能衆は、現在20〜80代までの25人。3年前からは長男のみも参加を認めることを決めて存続に努めている。舞の動作や技術を教えることも重要だが、先祖の心を伝えていくことが何よりも大切。そうすれば後輩にも能衆としての自負が自然と芽生えてくる」

「西浦田楽の魅力は。代々使われてきた仮面に着ける時、能衆は先祖に思いをはせる。古くから同じ舞を続けてきた先祖とのつながりを強く感じられるのが西浦田楽。後世に残すべき伝統芸能があるだけで、この地の人々は生きていく意義を見いだすことができる」

（聞き手）水窪支局・大沼雄大

平成25年12月20日 静岡新聞の記事より



い調べていきました。保存会への質問の手紙のやり取りなどの活動をを通して、「山の中の集落で人が少なくなっている場所が多い」「仮面をかぶる祭りが多い」「豊作・病気なしで元気で生活したいという人々の願いがある」「保存会があり、伝統芸能を続けようとしている」

過疎化や後継者不足の中で保存会を立ち上げ、保存・継承の努力や工夫をしていることなどが分かりました。また、それぞれの地域の人々の願いを考え、伝承者の方々の生き方に触れることができました。これら「浜松の宝」を伝承者の方々に任せきりにするのはなく、将来の浜松を担う市民として民俗芸能に対する関心を高め、保護・継承の意識の裾野を広げることができました。人々の生き方に触れ、まだまだ自分の知らない浜松の魅力や奥深さを知ったことで、浜松への誇りと愛情が深まったように思います。

**民俗芸能次世代に  
伝える小学校の学習**

浜松市立広沢小学校 教諭 杉山貴和

グループ発表する3年生

3年生の社会科「まちの人たちが受けつぐ行事」の中で地域の人々が受け継いできた文化財（民俗芸能）や年中行事についての学習をしました。はじめに取り組んだ「西浦の田楽」の学習では、保存会会長・ご長男、お孫さんの三世代で来校してくださいました。田楽の説明を聞いたたり、踊りの一部と一緒に踊ったりしました。

次に「寺野のひよんどり」「川名のひよんどり」「懐山のおくない」「川合花の舞」「横尾歌舞伎」「遠州大念仏」の6つの課題別グループを作り、学習をスタートさせました。「場所と地域の様子」「歴史やまつりの内容」「人々の願い」「続けていくための工夫と努力」の4つの観点について「遠江のひよんどりとおくない連絡協議会」のDVD、インターネットを使



熱心に民俗芸能を説明

などの共通点を見付け、発表することができました。また、年表から浜松の人々が受け継いできた文化財（民俗芸能）の歴史の古さに気付き、驚嘆の声が上がりました。

学習の最後には、直接できないものも多いが、一度実際に見てみたい」「ゆるキャラを作つて、知らない人に紹介したい」などの意見が出ました。今回の学習から、浜松市は民俗芸能の宝庫であること、その一つ一つには地域の歴史や人々の願いが込められていること、

### 民俗芸能装束の揃え 事務局長 柴田宏祐

#### 地に即した装束を求めて

長い伝統に立って行われてきた民俗芸能の装束は大事な役割を持っているが、様々な事情によって変遷をしてきたのが実情である。

西浦田楽の装束も揃えが切望されて久しい。それは経年劣化と共に所作に適さない布地が使用されてきたという理由であった。そこで、凍てつく冬の夜を徹して屋外で舞い続けるという状況や激しい所作に対応した素材選びを伝承者と共に検討を始めた。これまでは、舞台公演の映りを配慮して絹地の着物や袴、たっつけで行われてきた。それではどうも舞の際に体にそぐわないし、寒くて仕方ないという感想を持ち続けてきた。



整った装束で 西浦田楽

草深い山村で数百年前から行われてきた民俗芸能で照り輝くような絹地の装束の揃えがないと思ひ、古い装束の断片を見ながら、少なくとも遠州木綿の素材まで揃えることができ、素材選びが始まった。

しかし、かつては機業地として盛んに織られていた織屋も姿を消してしまい、それを手にすることに難渋した。数少ない織屋の倉庫に残されていた遠州木綿の布地を探し当て、それに染を重ねて縫製にこぎつけた。寒さ対策として、裏地をつけたり、たっつけのはばきを一体にして動きやすくしたりした。激しい所作に対応して手縫いから丈夫なミシン縫製を敢えて取り入れたり、男子の用使用のフアスナーを取り付けたりする等の機能性も秘かに取り入れたりすることも加えた。

#### 祭りに生きる装束

西浦田楽の日、午後一時に観音堂境内に能衆全員が集まり、舞庭の準備にとりかかっていた。全員が準備の段階から昨年完成した装束に身を包んでいる。茶色の着物に紺の羽織、下は袴やたっつけでぎっくりとした生地は新しさを感ぜず、景色の中に溶け込んでいく。やがて、「おこない」に向けて、観音堂に居並んでいる。装束が一堂に揃う。楽堂に集まった能衆の間には「タヨガミ」の少年の装束もその場に溶け込んでいく。荘厳な雰囲気の中に神が迎えられ、夜半の開幕に向けて、雰囲気はいやが上にも高まっていた。



↑以前のおくないの様子  
←揃いの羽織、袴で行われている 滝沢のおくない



#### 装束の揃えに従事して

私は遠州の無形民俗文化財の装束の揃えにここ数年、数多く携わってきた。生活の洋風化に伴って、伝統ある民俗文化財の装束も身近で調達できないために乱れてくるが多くなった。上は直垂を羽織りながら下から靴下で舞うような場面も出てきた。



#### 今年度の冬の祭事

##### ■川名ひよんどり

今年初めて「はらみの舞」で女性が舞い注目を集めた。道内の様子が火クレーンに写され最後まで大勢の人が見学した。



##### ■川合の花祭り

浜松市内では珍しい花祭系の芸能で地域と一体となって継承している。

##### ■百万遍の念仏講

祭の周り番の人たちが朝から準備を始め午後から大きな数珠を回しながら無病息災を祈っていた。

##### ■神沢のおくない

清童中の2年生が堂々と舞いを披露した。広報はままつ1月号の表紙を飾る。

##### ■雄踏歌舞伎万人講

小学生から大人まで出演し感動的な芝居を披露した。広報はままつ3月号の表紙を飾る。

#### ■あごがき

副会長大石伝次さんの「懐山のおくない」が巻頭を飾ってくれました。民俗芸能に対する見識の深さと健筆ぶりに敬意を表さずにはおられません。

また、全国各地で公演された成果や市街地の小学生が学習を取り組んだ記事等多彩な内容を盛り込めることができました。

これからも会報を通して、情報交換して保存と伝承に努めていきたいと思ひます。

(柴)

# 全国こども民俗芸能大会に参加して

大きな声で自己紹介  
4年 前島理玖

ほくは東京に行つてぶたいの上ではじめておどるのですごくきんちようしました。練習をしていくうちにみんなとおどりをあわせられるようになりました。いよいよ本番の日になりました。リハーサルするとき、練習ではみんなとおどれたのにちよつとしばいしてしまいました。なので本番前にもう一度3人でおどりの練習をしました。そしてうまくできたのでよかったです。

全国で8チーム出場します。ほくたちは5番目です。いよいよほくたちの出番です。みんなぶたいの上に行きました。はじめはこしようかいです。大きな声で名前を言いました。おどりをふえと太こに合わせおどりました。3人もしゃべいすることなくともしゃべいとお客さんの前でおどることができました。夏休みに東京に行つていい思い出になりました。

大勢の前で踊ったのは初めて  
6年 前嶋紘斗

今年の夏休みは、いつもと違う夏休みでした。夏休みの練習は、とても暑く、汗びっしょりになってやりました。いくつもある種類の中で、ほくは「片稲むらの舞」を踊ることになりました。体に稲穂で編まれた大きな飾りをかけ、右手にはコウシバを持ち、チントトのリズムに合わせて踊る舞です。

編集 浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会・発行 浜松市



本番の日、幕が上がり、ほくの順番が近づくと連れて心臓がドキドキしてきました。いよいよほくたちの出番。あんなに大勢のお客さんの前で踊つたのは初めてだったけど自分なりに上手に踊れたのでほつとしました。テレビ取材も受けたり、東京に友だちと来れたり、ほくには特別な夏休みになりました。僕の住む地域に古くから伝わる「ひよんどり」は大切な無形文化財です。毎年毎年続けていくことは、本当に大変だけど、大切な文化として守つていきたいと思ひます。

片稲むらの舞大成功  
6年 前島隼人

8月17日に東京でひよんどりを行いました。東京に到着してひよんどり会場につくと荷物を置いてすぐに練習が始まりました。リハーサルをしていた時には、人は関係者しかいなかったが本番になったらお客さんが大ぜい来ていたのですごくプレッシャーがかかりました。リハー

サルが終わると少しきゆうけいし昼食をとりました。その後インタビューがあったのできんちようしながら答えました。そしてついに本番を迎えました。本番は順のまい、片剣のまい、片稲むらのまいです。ほくと紘斗さんのやるおどりは、片稲むらのまいです。出番がだんだん近づいていくときんちようとしてプレッシャーがわきあつてきました。前の人のおどりが終わつていよいよほくたちのおどりとなりました。ステージに立つた時は最初から最後まで成功するか不安でした。だけど失敗もせずすべて成功しました。きがえ終わった後もインタビューがあったので答えました。とてもきんちようしたが、よい思い出となつたのでよかったです。

緊張した東京のひよんどり  
5年 北沢勇都

ほくは、8月に、川名の行事で東京に行きました。いろいろな県の人々が東京に来ていました。舞台上上がった時は、緊張していなかつたけど踊っている時、緊張して間違えてしまつたけれど全部踊れてよかったです。練習は5回以上やりました。ひろうする前は、インタビューされたりました。ほかの人たちもすごくはげしかったりしてすごかったです。中には、幼稚園の子もいて、高校生の人もいました。自分たちの出番まで、何も見れなかつたけどリハーサルの時に少し見れました。まだ5年生なので、あと一年がんばりたいです。



大きくゆっくり踊れた  
5年 北澤拓音

ほくは川名にすんでいます。川名には毎年1月4日にやる川名ひよんどりという文化があります。ひよんどりには面、刀、すずを使うおどりや、わらをまとつておどるおどり、ししのおどりがあります。

ほくは、4年生の時からおどりを始めました。すずをたたきながらおどる順のまいと刀をつかつた片剣のまいというおどりをやつたことがあります。

今回の、全国こども民俗芸能大会に向けての練習では、なるべく1つ1つのうごきを大きくゆつくりとおどれるように練習しました。本番では日本青年館大ホールという大きな会場で、テレビのカメラや見ている人たちもたくさんいて、すごくきんちようしましたが、ほとんどまぢがえすにおどることができたのでよかったです。他の県のいろんなおどりを見ることができて、たのしかったです。川名ひよんどりみたいなのに他の地区でもいろいろ文化があるんだなあと思ひました。この大会に参加できてよかったです。

私たち川名の伝統芸能を知ってもらえた  
5年 前嶋優奈

8月17日に東京の日本青年館で、全国こども民俗芸能大会がありました。私たち「川名ひよんどり」も出演しました。わたしは、4年生と3人で順の舞をやりました。練習では3人の動きがなかなか合わなかつたので、本番でうまくできるかとても心配でした。でも本番では3人の動きが合つて、今までの中で一番うまくできたのでよかったです。

私は、芸能大会に参加して、他の地域にもいろいろ民俗芸能があることを知りました。どの地域も民俗芸能をとても大切にしていると思ひました。そして「川名のひよんどり」も、他の地域の人たちに知ってもらえたと思ひます。

練習は大変だったけれど、とてもいい思い出になりました。



作文を原文のまま掲載しています。